スパイス(普通の勇者の物語)

虫松

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイス（普通の勇者の物語）

【Nコード】

N8747Y

【作者名】

虫松

【あらすじ】

魔界のプリンセス、ナターシャ　スパイは憧れの勇者様に会って、ロマンチックな恋に堕ちる野望を達成させる為、様々な障害を突破する。

第一話 魔界のプリンセス

魔界のプリンセス、ナターシャ　スパイは爺や事、大魔導士、ゲラ
ハーゴンより

王女の間で魔法の勉強を講義を受けていた。

「スパイ様、魔法には火、風、土、水の基本がございまして、それ
らは互いに

反発しあっています。例えば通常の魔導士は火の魔法が得意なものは水の魔法は使えません。

また……」

（退屈だわ……勇者様ってどんな人なんだろう、白馬に乗ってる
のかな。

一瞬でモンスターとかなぎ払って、あつという間に、あー会いたい）

「スパイ様、スパイ様！聞いておられるのですか！そんなうつろに
聞いておられては

魔界界のお姫様としては失格ですぞ。我々、上に立つものは下に見
本として……

（つまらない。何この軟禁生活は、早く外の世界に出て、勇者様に
あつて、激しい愛に堕ちていつて、

けして結ばれてはいけない禁断の愛！素敵だわ。ロマンチックはあ
ー燃えるような恋！）

ナターシャ　スパイは17歳になる。魔界のプリンセスである。

八重歯が印象的で身長は170cmほど、髪はロングにポニテール、赤いリボンをつけている。黒いドレスに右手には、悪魔の杖という。

一つの目悪魔の武器、

目の下に口がついている。二本の牙ねじり棒めちやくちゃ、おしゃべりである。

「スパイ、爺やの話全く聞いてなかったなあ。」

「飽きちゃった。同じ話ばかり。この魔界は化け物ばかり。ロマンチックの欠片もないわ」

スパイの言っているとおり、魔界には3mほどのミノタウロス（牛と人の化け物）や

地獄の番犬、ケルベロス（頭が3つある獰猛な犬） 首のない兵士

デュラハーン（片手で斧持った騎士）

など地獄形の魔物達がお城を警備していた。

「何か口実をつけて、この城を出てく方法はなにかしら」

「そうだなあ。勇者討伐とか、でもお姫様じゃない奴らがいくよな」

この魔界において唯一気兼ねなく、本音で話せるのは、悪魔の杖だけだった。

（父（魔王）に直談判するしかないわ。絶対、勇者様に会うんだから。会うんだから！）

「おいおい、よからぬこと考えてるんじゃないの¥（／／／／）

「¥

悪魔の杖を握りしめ、スパイは魔王の部屋へ向かうのであった。

第二話 大魔王

「ダメだーああああ。行かせるわけないだろーうが！」

魔王のお城の、王の間 大魔王 ダークドラゴンの声が兎玉した。大魔王、ダークドラゴンは体長は10mはあるうかという。大きな体格、太っている、デブであるゆえに空を飛ぶ事はできない。

「でも、でも、外の世界も見て見たいし、ついでに勇者も倒しちゃうみたいな。いいじゃん！このデブ親父！」

「何と、この大魔王に向かって口の聴き方！娘で、なければ火炎ブレスで

焼き焦がしてくれるわ」

「やれるもんなら、やってみせなさいよ、」

(ちよつと、それはまずいんじゃないの)
悪魔の杖は冷や汗をかいた。

「ミノタウロス、スパイを部屋に連れ戻せ！」

両脇にいた。2体の魔王のミノタウロスはスパイ姫を捕まえようと右腕と左腕を伸ばした。その瞬間

スパイはミノタウロス肘の関節をひねり1体を転ばせると2体目を悪魔の杖で頭を跳ね上げた。

「スパイをみんなでとり押さえる！」
沢山のミノタウロスが扉から出てきて

スパイは両脇にミノタウロスに抱えられ中を浮いた。

「死ね、クソ親父！」

ミノタウロスと一緒にスパイは王女の間に関連戻された。

(こんなに、おてんば姫にそだつとは・・・)

大魔王、ダークドラゴンは誰もいなくなった王室で一人ため息をついた。

第三話 格闘訓練所

スパイは格闘訓練所へ向かった。

むしゃくしゃするので暴れてすつきりする為であるが。

スパイの強さは折り紙付きであったので、誰も相手をしたくなかった。

「オーガーさつさと前に出てこんかい！」

オーガー、巨大な力もち日本の鬼に当たる魔物。

「スパイ姫、今日はもうこのへんで」

「何だと。まだ始まったばかりだろうが！」

あたりを見回すと、沢山の魔物が倒れ、治療室へ

搬送されていた。骸骨兵士は粉々に砕け散っていた。

「そつちが、来ないというなら。ダークネスファイヤー」【火の属性】

悪魔の杖を天高く掲げると、空から沢山の炎の塊が降り注いだ！

「ぎゃあああああー」

「火事だ、急げ消化部隊！」

燃え上がり、熱くて暴れ回るオーガーに水龍の放水が始まった。

「スパイやり過ぎじゃない」

「こんなもんじゃ、私の怒りは収まらないわ」

「スパイ姫さまー。何をしてらっしゃるのですか？魔法の勉強の講義はとつくに始まってますぞ！」

大魔導士、ゲラハーゴンが格闘訓練所に現れた。

「爺や。お前が私の相手をしてくれるのか！」

「えー。スパイ、大魔導士はマズイよ。」

「ほほほっほー、スパイ姫様の退屈しのぎに付き合いますかな」

大魔導士、ゲラハーゴンは大悪魔の杖を両手に持った。

ゲラハーゴンは頭が脳みそで3分の2覆われている。

白ヒゲと身長は150cmと小柄なおじいさん。

「ダークネスファイヤー！」

スパイは先ほどと同じように悪魔の杖を天高く掲げると空から沢山の炎の塊が降りそそいだ。

「アイス ストーム」【水と風の属性】

ゲラハーゴンは両手に持った、大悪魔の杖から冷気の風がふき、炎の塊を固め。吹き飛ばした。

「実践、授業の始まりですな」

「アースクエイク！」【地の属性】

スパイは悪魔の杖を地面指すと地面が割れ、ゲラハーゴンに向かつて亀裂が走り。地面が割れた。

「ほっほほほ！ マグマ ハリケーン」【火と風の属性】

ゲラハーゴンは宙に飛びスパイの足元が割れ地下からマグマが吹き出した。

同時にハリケーンが襲ってくる。

「スパイ、もうダメだ、降参しよ。大魔導士は水風土火全てを操れるスペシャリストとても魔法じゃかなわないよ」

「ならば、格闘で脳みそぶっ叩くのみ！

スパイは悪魔の杖を両手で握りしめた。

第四話 家出

「ファイヤーフレーム！」【火の属性】

スパイは周りに囲っていたマグマをスパイは悪魔の杖を横に振りスイング
炎の壁を作り突破した。

「ハリケーン来たよ！どうするの？」

「アースウォール」【地の属性】

悪魔の杖を地面に刺しながら横に走りながら
線を引くと、

ハリケーンの前に土の壁が吹き出した。

ハリケーンは土の壁と激しく衝突した。

（後、30mで爺の頭を殴れるわ）

スパイは爺や目がけて真っ直ぐに走り出した。

「ほっほほ。流石、スパイ姫様よくぞ突破されましたな。」

（後、20m）

「でも、まだまだ教えてない事もあるのでぞ」

（後、10m）

「バブルスリープ」（睡眠させるシャボン玉）【水と魔の属性】

爺や事、ゲラハーゴンの大悪魔の杖に口から泡が無数に飛び出し
スパイ姫に向かって排出された。

(後3m……)

スパイは悪魔の杖を振りかぶった状態で目がウツロとなり。後ろへ
倒れた。

「ぐがあああ、ぐがあああ！」

「大魔王ダークドラゴン様に劣らないイビキ……ほっほほほ」

スパイ姫はベットに寝かされていた。
時計を見ると23時を差している。

(くそお、もう一步だったのに。)

「スパイ起きたのかい。ゲラハーゴンに戦いを挑むなんて。むちや
くちやだなあ」

「こんな生き地獄みたいな生活、もう我慢できない」

「まさか家出する気じゃないよね。僕は嫌だよってあーあ」

悪魔の杖を片手に飛竜にまたがったスパイは勇者の元へ飛んでいく
のだった。

第五話 ファイアンセ

「何！スパイが飛竜に乗って家出しただと！」

「はい、見張りのものが確認しました。」

魔王ダークドラゴンと大魔導士ゲラハーゴンは王の間で部下の報告を聞いていた。

「どういたしますか魔王様、姫は無理矢理連れ戻せば、多くの犠牲がでます。」

「もつと、おしとやかに育てれば良かった」
魔王は頭を抱えた。

「この魔界で生きていく為には、おしとやかには育てる環境ではありません。
何せ地獄の番犬やら首なし兵士、巨大なミノタウロス、死の世界。
花も緑もないのですから。」

「育て方はともかく、連れ戻さないと。面倒なことになる前に」

「ファイアンセのベルゼブブ（八エの王）に迎えに行かせましょう。」

（あいつ人間の姿の時はかっこいいんだけどな。魔人化するとデカイ八エになるんだよな）

「まあ実力的にはスパイに勝るにも劣らないな」

(ただ、かなりスパイには嫌われていたような)

「フィアンセの説得ならスパイ姫も納得するでしょう。おい、早くベルゼブブを呼んで来い！」

兵士は数分後、ベルゼブブを王の間に呼んできた。

「愛しのスパイ姫、必ずや連れ戻してみせます。」

ベルゼブブは魔王と大魔導士の前に右腕を前に出し貴族風の挨拶をした。

ベルゼブブは擬人化していた。背丈は190cm。痩せ型、気高い紳士のような

格好をしていて、中々の美男子である。

白い肌、綺麗な目。普通に街を歩いていたら

カッコイイいと女性群から注目を集めるだろう。

「うむ任せたぞ、ベルゼブブ。姫は気性が荒い。手荒な真似はするな。」

「お任せあれ！そつれ」

ベルゼブブはデカイハエとなって、飛んで行った。

第六話 勇者はどこ？！

「でもさあ、勇者って何処にいるのー？」

飛竜に背中に乗ったスパイと右手に握られた悪魔の杖は問いかけた。夜空の月に向かって飛竜は飛んでいる。

飛竜は体長、3mほど、自動車くらいの大きさである。

「何処にいるって、考えなく出ってたから知らないわよ」

（あーあーお腹が空いたとかいって帰ってくれないかな、今まで姫様級の

いい暮らししてたんだぜ。いきなり平民の暮らしとか無理でしょう）

悪魔の杖は目を細めてスパイを見た。

「何よ、その〜目は？どつかのお城とかに行つて、王様とかに挨拶してる

はずよ。そんなもんじゃない。ロールプレイングの勇者って」

「そ・・・そうだよね。早くお城に行こうか。」

（はあー長くならなきゃいいけど。）

「まずは冒険者が最初に訪れる、アルベルト城へ！」

スパイの飛竜は東へ進路を変えた。

その後ろにベルゼブブのハエが追いかけていた。

(スパイ可愛いよスパイ。逃げてでも逃げてでも追いかけて見せるよ君の匂い体臭は決して消すことはできない。僕の嗅覚はハエのように以上に発達しているのさ)

その頃、勇者は、アルベルトの城で王様に冒険の旅立ちの報告をすませ。

次の町。カザフの町の宿屋に宿泊していた。ベットに横たわり横の窓から

星空を見る勇者。今日は月が満月、何か得した気分になる。

(これから、1人旅は辛いよな。そうだなあ僧侶は必要だよな。

戦士も欲しいよな。

魔法使いも全体攻撃できるし。武闘家も素早く攻撃できるよなあ)

とか考えながら眠りについていた。

第七話 王様訪問

2日後の朝というか早朝にスパイ達はアルベルトの城に到着した。飛竜はクタクタになり城壁に寄りかかっている。

「遠いねえ。さすが最初に勇者が訪れるように設定されてるな。」

「何それ！誰かが作り出した世界みたいじゃない。」

（今まで勇者って沢山いたけど。みんな魔王様が抹殺してたんだよ。）

朝5時にアルベルト城に入ろうとすると兵士に呼び止められた。

「まだ、王様は眠っていらっしやる。10時にまた来てください。」

「私すごく急いでいるんです。」

「いやあそう言われましても、王様は公務でお疲れの身、今すぐ会わせるわけには参りません。」

2人の兵士は槍でバツテンにトウセンボをした。

「スパイ、朝ご飯でも食べに行こうよ・・・」

「つ、杖がしゃべった・・・」

「・・・」

（こいつ、今から心臓えぐり出して目の前で握りつぶしてやるつか・

・
いや、ここで騒ぎを起こせば、勇者様に会えなくなるというか魔物
扱いだわ)

「また、後で来ます……」

スパイは両拳に力を入れぐっと耐えた。
その後、カフェレストランで食事をとりコーヒート
シユガートーフトを頼んだ。いくらか気分も晴れた。

「じゃ、行きますか」

「お客様お代金を、お忘れですよ。」

「えっ何それ？お金なんか持って来てないわよ」

「まあどうしましょう。あなた、無銭飲食って言って罪になるのよ。
誰がお金持って来れる人はいないの？」

お店は不穏な空気が流れた。

「フィアンセである僕がお支払いします。」
ベルゼブブが擬人化してスパイの前に現れた。

「良かった〜ベルゼブブ様じゃん。これでスパイも魔界に帰るよね。
）」

「……」

「どうしたんだいハニー。フィアンセの僕が突然現れて嬉しくって

感動しちゃったんだね。わかるよBAYBE」

ベルゼブブがスパイの肩に腕を回そうとした肩に触れる瞬間だった。

「このハエ男が！！！！！」

ベルゼブブは悪魔の杖でスイングされお店の端まで吹っ飛んだ。

どー~~~~ん

「おう、ハニー手荒い感動的な仕打ちありがとう」

「だ・・・大丈夫ですか？」

「OK大丈夫。いつも事なんで、愛情表現って奴だろハニーっていいない・・・」

スパイはさっさとお店を出て王様に会いにお城に入った。

第八話 お金

スパイはアルベルト城に入った。中は食堂、兵士の宿舎、馬小屋、武器庫、教会など兵士が巡回していた。

（しょぼい城だわ。魔王城の100分の1程度ね）

スパイは謁見の間に入り王様に会った。

王様は中央の玉座に座っている。横に大臣らしき男がいた、白いヒゲと王冠と赤い服着た誰がみても王様だ。

「そなたは名はなんと申すのじゃ」

「ナターシャ スパイと申します。」

（はて何処かで聞いたような名前じゃな）

「何処かの国の王女さまかの？」

（そんな事はどうでもいいんだよ）

「いいえ。勇者様は、こちらに来られてませんか？」

「勇者殿は3日ほど前に旅立たれた。」

（しまった入れ違いだったか）

「勇者殿の協力者であるな。ここに準備金、銀貨100枚ほどある。お渡ししたそう」

スパイはお金を貰った。

(何か、いい奴じゃん、こいつ)

スパイは気分よく、お城を出て行くのであった。

悪魔の杖は色々、突っ込まれると面倒なのでお城の中では目を閉じだまっていた。

「はぁーこれから、どうするの?」

「とりあえず、お風呂に入りたいわ。宿屋に宿泊するわ」

「しかし、世の中ってサービス受けるのに、お金を払わないと罪になるのね。」

「そ・・・そうだよ。」

(もしかして楽しみ始めちゃったのかな)

(愛しのハニー発見! そうだ魔王様に報告せねば。)

ベルゼブブは伝令用の小蠅を飛ばした。

その頃、勇者は、初めての洞窟探検で入り口へやって来た。

(薬草5個、毒消し草5個、たいまつ5個、これだけあれば大丈夫だろう、

誰か、明かりをつけられる魔法使いや僧侶がいればなあ楽なんだけ

ど)

とか考えながら洞窟内に入ってしまった。

洞窟のモンスターは手強く半分ほど来て引きかえした。

(やっぱり仲間いないと厳しいわ、敵の数も結構いるし。)

勇者はカザフの町に戻ってきた。

(また。道具屋で薬草買わなきゃ。お金かかるなあ。世の中って・・・)

第九話 弱点

スパイはアルベルト城下街で買い物をしていた。下着にタオルにクシにお菓子。

「お菓子は買いすぎじゃない。」

「魔界には、こんな美味しいお菓子なかったもん。」

（もう半分以上、使っちゃよ。お姫様はいいねえ。金銭感覚なし）

悪魔の杖は最初はもの珍しそうに街の人に見られ、たずねられていたが慣れたようで誰も話しかけて来なくなった。

「ものしゃべる武器って、売ってないみたいよ。」

「まあ僕は一応、魔界でも珍しい魔装武器だからね。」

「売ったらいくらになるのかな？」

武器屋に聞いたら、お引き取りできませんと言われた・・・

「売るって！値段つけられないよ！」

（困ったら売る気なんだ・・・ヒドス）

スパイは雑貨屋で香水と聖水と口紅を買った。

「あれ？化粧なんかしたっけ？」

「あの後ろにいるストカーのためよ」

（ベルゼブブ様、わかりやすいよー尾行してるの）

（さて、魔界に連れ戻すタイミング難しいな）

ベルゼブブは店の外でスパイ姫の買い物の様子を壁に寄りかかり右手を口にあて見つめていた。

スパイは購入した香水を体につけた。

「あーベルゼブブ様、対策か」

街の外にいる飛竜を迎えに外に出た。

（あっベルゼブブ様だ）

「やあスパイ！待ってたよ。お父上も心配されてる。一度魔界に戻ってはどうかろう」

「嫌だ！まだ勇者様に会ってないし」

「そうか……手荒なまねはしたくなかったんだが」

プシュ！

スパイはベルゼブブの顔に香水をかけた。

「ぐわあああくっせえええよーあああくせえええええ」

ベルゼブブは鼻を抑え苦しみ悶えた。

(ベルゼブブ様匂いにちょーーう敏感だからな。かわいいそう)

そして聖水を周囲にまんべんなくかけた。

「コラッ！逃げたつてすぐ追いかけてみせるからなあ」

聖水を巻いた地面は青白く光った。

「しつこい男は嫌われるわよ」

飛竜にまたがったスパイは空へ羽ばたき
カザフ町の方へ飛んで行った。

第十話 仲間

勇者は洞窟の近くの城、サルバトーレ城の城下町に入った。
武器屋、道具屋、宿屋、教会など一通りある。

勇者は武器屋に行った。

（新しい武器を買って洞窟に行きたいけど、高いな。誰か金持ちみたいな人はいないかな？）

武器はお金がだいぶ足らなかったのだから、
教会へやって来た。

小さい教会だが雰囲気はある。

厳かな感じだ。イエスキリストの十字架
が中央にステンドグラスが周りがある。

「もしかして勇者様ではないですか？」

「はい、そうですが」

教会の神父さんが話しかけてきた。

「実は息子のシモンと一緒に魔王退治に連れてってもらえないでしょうか？」

「えっいいんですか！」

「はい、是非勇者様のお力添えをさせていただきたいのです。」

神父さんに連れられて部屋の奥へ息子のシモンを紹介された。

僧侶シモンは坊主頭に目は細い。

体はある程度鍛えている。

170cmほどである。身なりは布の服を着ている。

「勇者様の旅に是非、私をご同行させてください。」

「もちろん、こちらこそ、よろしく」

勇者と僧侶シモンは硬く握手した。

(良かったこれで洞窟の奥まで行く事ができるな。助かる)

その頃、スパイはカザフの町で勇者が洞窟に向かったの情報を得た。

「中々、会えないわね。勇者様。スパイは今すぐ会いたいの」

「でも1日前にいたみたいだから、もう会えるんじゃないの」

「何て自己紹介すればいいのかしら」

「とりあえず魔法使いだよね。戦士でもあるな。龍使でもあるし」

「よし、ドラゴン魔法戦士にしよう、1人三役！何か凄い貴重な存

在じゃない！」

（そんな職業ないけど、まあいいか。本当は魔界のプリンセスだよ
ね）

スパイは飛竜にまたがり洞窟へ向かった。

第十一話　ゴブリンの洞窟

スパイは勇者より先に洞窟についた。

この洞窟には多くのゴブリンが住んでいるため

ゴブリンの洞窟と呼ばれている。スパイは一番奥の

地下5階のゴブリンの間で

親玉ホブゴブリンとお茶を飲んでいた。

ゴブリン（小型な邪悪な精霊。裸で棍棒を振るう知能は低い）

ホブゴブリン（大きなゴブリン、知能は高い。斧と鎧を装備している）

「まさか、スパイ姫様が遠路はるばる来て頂けるなんて、オラ至極
幸せ・・・」

「もう良い、建前は！そんで、勇者様は一回ここに来たであろうつ、
で、実力はどれほどののだ勇者様は」

「はい、洞窟の地下2階まで来ましたが、途中で引きかえしました
ダ。

初級冒険者レベル5から8程度かと思えますダ」

「次は客人であるが故、丁重にもてなすのだぞ」

（なんと、まだ弱いらしい、ベルゼブブに軽くあしらわれてしまっ
ぞ）

「はあはははー姫の仰せの通りに」

ホブゴブリンはスパイに平伏した。

「万事手はず通りたのむ。」

スパイはみたらし団子を口にいれながら、指示をした。

勇者と僧侶が洞窟の入り口に着くと辺りは静まりかえっていた。

「この前、来た時と様子が違うぞ。もっと洞窟の奥からゴブリンのうめき声や叫び声がしたのに」

「誰か先に来て倒してしまったのでは？」

「考えられるな、とりあえず慎重に進もう・・・」

勇者達が洞窟に入ろうとすると子供ゴブリンがやって来て。

勇者に手紙を渡し去っていった。

「なんだ、今の何々・・・」

【手紙の内容】

洞窟の地下5階に可愛いく気高く美しい女を誘拐し、監禁している。同封の地図を参照に進むべし、宝箱も罫を解除して開けてある。宝箱マークしてあるので、回収しつつ進むべし。早く来ないと女を食べてしまうぞ。

「なんか、おかしくないか、この手紙の内容」

「とりあえず女の人が奥にいるようですから助けにいきましょう」

勇者達はサルバトーレ城で買えなかった。武器、鎧を宝箱から回収しつつ、地下5階に進んで来た。壁には矢印の案内板までついてる始末。

「ずいぶん親切だな。こっちは行き止まりです。だって」

「ゴブリンも、全く会いませんね。出てくるのはコウモリ、虫系のモンスターばかりです」

その時―

「勇者様―助けて」

女の声が洞窟内に見玉した。

第十二話 出会い

「親分、勇者様が間もなく来ますダ」

「わかってるだろうな！私と勇者様はダイナミックかつロマンティックかつ」

「ドラマティックに会わなくてはならない。多少の演出は必要だ！」

「もう演出どころないんじゃないかな？やり過ぎじゃない意味わからない。」

「オラあ、姫様の為に、寝ないで台本覚え・・・」

「黙れ！もう来る！手加減するなよ！」

「うおおおおお」

ホフゴブリンは興奮して胸を叩いた！そこへ勇者と僧侶が駆けつけた。

「よ・く・ここま・でーたたたたどりつけたダ・・・褒めてつつつかわ

（緊張しちゃダメダ。姫様のマエダ。恥かかすな・・・）

（このアホが！棒読みではないか！）

「おい、女の人は何処だ！」

「えーっと、えーっと、ししんぱいいいしなくてもも

(.....)

「あそこの鉄格子にいますよ勇者さん」

「よし戦闘開始だ！」

ホフゴブリンは僧侶を斧で横に振るった。

「うわあああ」

僧侶は壁に激突した！

「大丈夫か！シモン！」

「オラー！頑張るだー！」

ホフゴブリンは斧で勇者の真正面に振り下ろした。

勇者の持っていた鉄の盾は間ぶつ立つに割れた。

(あーあー勇者ここでTHE ENDやっとな魔界に帰れるよ)
悪魔の杖が目をつぶった瞬間

「くおおおおらっあああ」

洞窟内にとてつもない魔王の声にた雄叫びが兎玉した。

「ヒィーヒィーヒィー」

ホフゴブリンは立ち尽くし足がすくんだ。

「オラもう降参しますダ。もう悪いことしませんダ。約束しますダ」
ホフゴブリンは武器を捨てて謝りだした。

勇者はスパイを救出して、ゴブリンの洞窟から脱出した。

第十三話 自己紹介

「それにしても、さっきの魔物のうめき声はなんだったんだ。」

勇者達はサルバトーレの城下街に戻ってきた。

（あれはね魔王の雄叫びって言って知能80以上の人型魔物に効果があるんだよ）

悪魔の杖は心でつぶやいた。

「まあみんな無事でよかった。突然、謝りだしたなホフゴブリン。」

「勇者様、助けて頂いて有難うございます。」

「君は帰る場所がないの？」

「そうですね。私のお師匠様がお亡くなりになって、親もいない私は

天涯孤独の身なんです。」

「そうなんだ」

（よく、そんな嘘が次々と出てくるな。魔王様、泣いちゃうよー）

「君は魔法使いなのかな？職業は何？」

「えーと、ドラゴン魔法戦士です。」

「聞いたことない職業ですね。」

(そりゃそうだよ。スパイがさつき考えたんだもん)

世の中、いろいろ知らない事もあるもんだ、という事で解決した。

「あなたの武器の杖ですか、邪悪な気が出ていますね。呪われているかもしれませんよ」

僧侶シモンはスパイの悪魔の杖が気になるようだ。

「あーこっこれは気にしないで、たまにしゃべりますけど」

「えっしゃべるの武器なのに」

「しゃべって悪かったなクソ坊主！お前を呪ってやるうか！」

「しかも下品だ・・・」

「これで勇者、僧侶、ドラゴン魔法戦士というパーティーになったな。ドラゴンいるの？」

「外にいますわ。飛竜ですの。冷却ブレスを吐けますのよ」

(そんな頼もしい奴いるのに、よく誘拐されたね。)

勇者と僧侶は同じ事を考えたのだった。

第十四 退屈

勇者と僧侶は前線でモンスターと戦っていた。

相手は豚の化け物 キングトーンとサイの化け物 突撃サイである。

キングトーン 鎧と盾と剣を持って二本足で襲いかかる豚モンスター
突撃サイ

初級サイのモンスター

サイに装甲のトゲのついた鎧で突撃する

(こんな雑魚、上級魔法ですぐ全滅できるけど、そうしたら勇者様の経験値上がらないわ)

スパイは後方から飛竜に乗りファイヤー【火の属性】アースバリア

【土の属性】

など初級魔法を唱え。勇者を支援していた。

「やったーモンスター倒したぞ！やったあ！」

「私レベルアップしました。回復魔法、ゲンキマン1を覚えましたよ」

ゲンキマン1 ヒットポイント30回復する初級回復魔法

「よかったな僧侶、それにしてもスパイは、レベル上がらないな何でだろうな？」

(私のレベルは50は超えてると思うわ、多分、魔界に行くまでレベル上がらない)

「スパイ、勇者にもあつたし、もう魔界に帰ろうよー」
悪魔の杖はスパイの耳元で囁いた。

「.....」

スパイは悩んでいた。このまま勇者といえるべきか、魔王に謝り魔界へ戻るか。

その頃、魔界の魔王城 王の間
大魔導士ゲラハーゴンと大魔王ダークドラゴンが今後のスパイ姫の
対策について話していた。

「魔王様、ベルゼブブから伝令小蠅が参りました。スパイは帰る気
持ちはないそうです。」

「ベルゼブブめ、頼りにならないな。ジョーカーを呼べ！」

「ま・まさか、殺人請負人ジョーカーを呼ばれるのですか！今まで
殺してきた冒険者は10000人、スパイ姫では絶対に敵わない相
手ですぞ。」

「勇者を暗殺してもらおう。死んでしまえば、諦めて戻ってくるだ
ろう。」

(ジョーカー危険すぎる。スパイ姫を守る為にもベルゼブブに連絡しなくては)

魔王の王の間に殺人ジョーカーが呼ばれた。勇者を暗殺するよう魔王に言われた。

「イエーイ、俺っちがきたからには、もう安心安心！ 暗殺安心お休みなさい？」

「ジョーカー寝てはいかんぞ！」

「はっ俺っちとした事がイエーイ」??

「お前はフザケタ奴だが、ちゃんと任務はこなすので期待してるぞ！」

「じゃあな行ってくるぜ、あの世とかトイレじゃないよイエーイ」??

ジョーカーは身なりはシルクハット顔は狂った感じ顔半分はゆがんでいるいつもグニョグニョ動いている。

背中には巨大な鎌 死神族である。

「さっさと王の間から出て行ってくれんかジョーカー」

「おおーつとヤベえお怒りだ！スタコラサツサ！イエーイ」??

ジョーカーは横走り王の間を出て行くのだった。

第十五話 八工王

大魔導士ゲラハーゴンから、殺人ジョーカーが動いているとの伝令を受けた

ベルゼブブはスパイ姫に伝える為、巨大な八工になって飛んでいた。

（何でこの俺が伝書鳩みたいなことせにやあかんだ、いやいや未
来の魔王になる

為にはスパイ姫と結婚せねばならんだ、これくらいの苦労など対
した問題ではない。）

とか考えながらブーンブーン羽を小刻みに動かし飛んでいた。

「何だありゃ！不吉な前兆じゃないか！」

巨大な八工を指差す村人

「危ないから、お家に入っていないさい」

子供を家に入れる親達

（……この村でつまみ食いしていくか）

ベルゼブブは擬人化して紳士の姿に変身した。

「誰あの素敵な紳士は？」

「きつと高貴な貴族のかたよ？」

「道を迷われたのよ？」

村の女達の目を釘付けにした。

(何でスパイ姫はこの俺の魅力に気づかぬのだ)

「すまぬが飛竜に乗った17ぐらいの娘を見なかったか・・・

「は・はい迷いの森にいかれました。」

「そうですか。ところで泊まる場所を探してるのですが、あいにくモンスターに襲われ持ち合わせがないのです。」

(先ほどのデカイハエだわ)

「もし、よろしければ私の家に、父と二人暮らしです。小さな家で何もありませんけど」

「ありがたい、喜んで・・・」

勇者達は迷いの森で塔への扉の鍵を探すべく、森を回っていた。

(こんなに木がおおい茂ってなければ、上空から、探せたものを)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8747y/>

スパイス(普通の勇者の物語)

2011年11月28日09時52分発行